

注好選・探要法花験記の漢字使用——その量的構造——

磯貝 淳一

はじめに

本稿は、東寺観智院蔵注好選・醍醐寺蔵探要法花験記という仏教説話・靈験記の和化漢文を取り立て、和化漢文資料群における両者の位置づけを考えることを目的とする。

この問題の解決に近づくためには、語彙・語法・用字等様々な方向からのアプローチによって、資料個々の性格を捉え、他資料との比較を行うことが必要となる。しかし、和化漢文資料の中でも、仏教説話や靈験記は、研究に供される資料が限られており、個々の資料についても基礎的な研究が少ないのが現状である。今回は、仏教説話・靈験記資料の基礎的研究として、巨視的なアプローチによって、漢字使用の概観を行うこととしたい。

私に作成した「東寺観智院蔵注好選漢字索引」及び「醍醐寺蔵探要法花験記漢字索引」に基づき、漢字使用の計量的考察から、和化漢文資料におけるこれら二資料の位置づけを試みる。

一、東寺観智院蔵注好選の漢字使用

東寺観智院蔵注好選には、

延べ字数 二五、二七四字
 異なり字数 一、八六六字
 平均使用度数 一三・五

の漢字が使用されている。これらの使用度数を基準にまとめたのが、以下に示した「東寺観智院蔵注好選漢字使用度数表」である。

東寺観智院蔵注好選漢字使用度数表

使用度数	異なり	延べ	累 計	
			異なり (%)	延べ (%)
500 ~ 401	2	909	2 (0.1)	909 (3.6)
400 ~ 301	4	1,467	6 (0.3)	2,376 (9.4)
300 ~ 201	10	2,403	16 (0.9)	4,779 (18.9)
200 ~ 151	5	827	21 (1.1)	5,606 (22.2)
150 ~ 101	21	2,594	42 (2.3)	8,200 (32.4)
100 ~ 91	2	197	44 (2.4)	8,397 (33.2)
90 ~ 81	12	1,019	56 (3.0)	9,416 (37.3)
80 ~ 71	11	838	67 (3.6)	10,254 (40.6)
70 ~ 61	11	729	78 (4.2)	10,983 (43.5)
60 ~ 51	18	988	96 (5.1)	11,971 (47.4)
50 ~ 41	31	1,428	127 (6.8)	13,399 (53.0)
40 ~ 31	53	1,907	180 (9.7)	15,306 (60.6)
30 ~ 21	88	2,209	268 (14.4)	17,515 (69.3)
20 ~ 11	234	3,114	502 (26.9)	20,629 (81.6)
10	48	480	550 (29.5)	21,109 (83.5)
9	52	468	602 (32.3)	21,577 (85.4)
8	47	376	649 (34.8)	21,953 (86.9)
7	56	392	705 (37.8)	22,345 (88.4)
6	87	522	792 (42.4)	22,867 (90.5)
5	97	485	889 (47.6)	23,352 (92.4)
4	110	440	999 (53.5)	23,792 (94.1)
3	175	525	1,174 (62.9)	24,317 (96.2)
2	265	530	1,439 (77.1)	24,847 (98.3)
1	427	427	1,866 (100)	25,274 (100)
合 計	1,866	25,274		

この表は、漢字の使用度数を区切り、それぞれの度数における

漢字の異なり字数と延べ字数を示している。異なり字の94.9%までを、使用度数50以下の漢字が占めている。全体を概観すると、使用度数のさほど高くない漢字が異なり字の殆どを占めていることが分かる。次に使用度数の上位にある漢字を具体的に示すため、使用度数51以上の漢字を掲げる。(紙幅の都合上、漢字使用頻度の全例を掲げることはしない。)

也	462	之	447	人	376	云	373	一	364	不	354	有	280	時	276	此	268	子	255	即	249	十	233
第	216	生	215	其	207	爲	204	者	195	三	165	天	158	佛	157	大	152	來	149	无	149	吾	142
以	141	王	140	五	133	中	130	二	128	故	122	四	118	母	117	上	116	可	116	如	115	身	115
得	113	日	112	行	112	道	112	後	110	是	104	見	99	汝	98	地	90	從	89	父	88	下	87
所	85	而	85	食	85	日	84	入	83	女	81	死	81	相	81	鳥	80	山	79	至	79	七	78
八	76	在	76	心	76	六	75	間	75	何	73	法	71	間	70	九	69	成	69	夫	68	言	67
家	66	百	66	名	65	又	64	於	63	世	62	令	59	知	59	師	59	作	58	等	58	出	56
我	56	千	55	金	55	文	54	欲	54	前	53	取	53	水	53	萬	52	返	52	年	51	若	51

これら使用度数上位の漢字について概観を行うと以下のようになる。

○「人」「天」「佛」「王」等の名詞類

① 普天有十之日為天下有大旱(上26ウ2)

② 即佛問羅云吾弟子中誰為上座(中18ウ6)

これらは、主に名詞或いは名詞の造語成分として使用される漢字である。これらの漢字が上位に存することは、仏教的な内容を持つ説話集である当該資料の特徴をよく表していると言えよ

う。

○「也」「之」「不」「即」「者」「可」「如」「而」「於」「令」等の助字類、

③ 何人投寶造佛立堂我又同人也(中20オ3)

④ 儀了作必死之藥(中26ウ1)

○「一」「十」「三」「五」「二」「四」「七」「百」「千」「萬」等の数詞類

⑤ 広雅云天去地一億一万余七千八百八十一里半也(中1オ6)

⑥ 彼此命終生天上二人共得樂(中31ウ2)

○「此」「是」等の指示代名詞、「吾」「汝」「我」等の代名詞の類

⑦ 即從此已來播殖養命也(上4ウ3)

⑧ 目連語大衆言吾等処々而聞仏声常有側如聞(中23ウ3)

○「云」「有」「生」「來」「得」等、主に動詞として使用される類

⑨ 即炎中有十三才許童顏甚妙也(中26ウ5)

⑩ 又云更不爾又云早來吾出法會(中29ウ6)

二、醍醐寺藏探要法花驗記の漢字使用

醍醐寺藏探要法花驗記には、

延べ字数 二七、三七五字

異なり字数 一、七八三字

平均使用度数 一五・四

の漢字が使用されている。注好選と同様、漢字の使用度数に基づいてまとめたのが、次頁に示した「醍醐寺藏探要法花驗記漢字使用度数表」である。これによれば異なり字の93.0%までを、使用度数50以下の漢字が占めていることが分かる。また表の後には使用度数51以上の漢字を掲げる。

醍醐寺蔵探要法花驗記漢字使用度数表

使用度数	異なり	延べ	累計		
			異なり(%)	延べ(%)	
500～401	1	404	1(0,05)	404(1,5)	
400～301	4	1,282	5(0,3)	1,686(6,2)	
300～201	10	2,397	15(0,8)	4,083(14,9)	
200～151	10	1,751	25(1,4)	5,834(21,3)	
150～101	24	2,934	49(2,7)	8,768(32,0)	
100～91	1	94	50(2,8)	8,862(32,4)	
90～81	7	594	57(3,2)	9,456(34,5)	
80～71	18	1,372	75(4,2)	10,828(39,6)	
70～61	21	1,385	96(5,4)	12,213(44,6)	
60～51	29	1,574	125(7,0)	13,787(50,4)	
50～41	39	1,761	164(9,2)	15,548(56,8)	
40～31	55	1,954	219(12,3)	17,502(63,9)	
30～21	112	2,820	331(18,6)	20,322(74,2)	
20～11	190	2,830	521(29,2)	23,152(84,6)	
	10	34	340	555(31,1)	23,492(85,8)
	9	39	351	594(33,3)	23,843(87,1)
	8	48	384	642(36,0)	24,227(88,5)
	7	59	413	701(39,3)	24,640(90,0)
	6	65	390	766(43,0)	25,030(91,4)
	5	100	500	866(48,6)	25,530(93,3)
	4	124	496	990(55,5)	26,026(95,1)
	3	165	495	1,155(64,8)	26,521(96,9)
	2	226	452	1,381(77,5)	26,973(98,5)
	1	402	402	1,783(100)	27,375(100)
合計	1,783	27,375			

六語八衆今矣道後其誦法
 51 55 60 66 72 80 101 122 154 222 404
 力成餘諸夢言等心見生人
 51 54 60 66 72 80 94 121 150 219 354
 千悲知讀淨願入所三即一
 51 54 59 66 72 80 90 118 147 207 326
 皆沙事住可門出身如佛不
 51 54 57 65 70 79 88 118 144 197 301
 雖說從子妙二得无聞以經
 51 54 57 65 70 78 87 113 140 193 301
 往本下比世又至中是花
 53 57 64 70 77 83 113 132 193 294
 念苦方夜持上山十天也
 53 56 64 69 75 82 112 131 176 261
 何還丘已汝五云日此之
 52 56 63 69 75 82 111 127 173 254
 樂供受乘七若王而者曰
 52 55 62 68 73 82 111 127 173 252
 菩依在國深四行年我時
 52 55 62 68 73 80 110 126 171 236
 部告女故然寺於爲師大
 52 55 62 68 73 80 108 124 163 228
 香觀作間自明聖僧來有
 52 55 61 67 73 80 106 122 158 224

以下、使用度数上位の漢字群を概観する。

○「人」「法」「經」「花」「佛」「天」「僧」等の名詞類

① 夫妙法蓮花經者常住不老之方種智還年之藥也(上1オ2)

② 其罪鎖盡當生十方佛前(上20ウ3)

これらの漢字は、主に名詞或いは名詞の造語成分として使用される。これらの漢字が繰り返し使用されていることは、当該資料が法華經靈驗譚の集成であることと深く関わりと考えられる。

○「不」「也」「之」「即」「者」「如」「而」「於」等の助字類

③ 即讀一卷畢置經案上其經踊空卷而置机(下8ウ5)

④ 增賀聖人者參議橘恒平卿之子息也(下30ウ8)

○「一」「三」「十」「五」「四」「二」「七」「八」「六」「千」の數詞類

⑤ 有一比丘修行諸國迷山路失方角(下14ウ7)

⑥ 時源尊捧經卷從第一卷至第八卷高聲讀誦(上23ウ5)

○「是」「此」「其」等の指示代名詞・「我」「汝」等の代名詞の類

⑦ 我在生間殺生放逸无惡不造也(上16ウ3)

⑧ 更有大城相去四五里次第有三十二大城是則地獄也(上20ウ5)

○「曰」「有」「誦」等、主に動詞として使用される類

⑨ 父母不信而曰何以知之(下22オ3)

⑩ 深發道心偏誦一乘遂發願書寫法花一部以爲持經(下23オ5)

三、和化漢文資料における二資料の位置づけ

1 周辺漢文資料との比較

これまでに概観を行った注好選・探要法花驗記の漢字使用について、それが和化漢文を中心とする他の漢文資料と比較してどの

ように位置づけられるかを考えてみたい。先学が行った同様の調査のデータを参照して比較を行う。対象とするのは、以下に掲げた10資料である。(次頁表に結果をまとめた。)

古事記(小林芳規氏の調査による。「古事記音訓表(下)」)、日本書紀(白藤禮幸氏の調査による「日本書紀の字彙について」)、続日本紀(星野聡氏の調査による「続日本紀総索引」)、将門記(浅野敏彦氏の調査による。「真福寺本将門記の漢字・漢語についての一考察」)、尾張国解文(三保忠夫氏の調査による。「尾張国解文宝生院本における漢字について」)、御堂関白記(前田富祺氏の調査による。「記録の漢字」)、小右記(浅野敏彦氏の調査による。「平安時代公家日記の漢字」)、『権記』寛弘七年一年間の漢字(一)、権記(同右)、高山寺本古往来(同右)、大日本国法華経験記(藤井俊博氏作成の「漢字頻度表」)、『大日本国法華経験記校本・索引と研究』所収を元に私に算出した。)

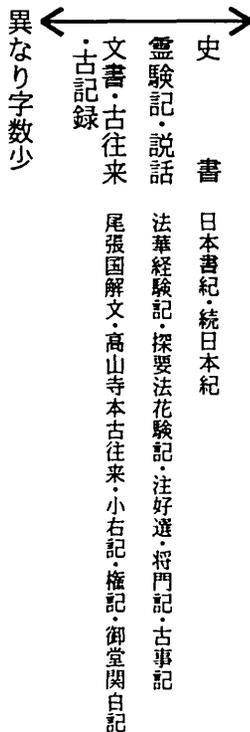
漢字の延べ字数と異なり字数を比較する。

各資料の延べ字数は大きく異なるものの、異なり字に注目すると、ある傾向性が認められるようである。まず、古記録(御堂関白記・小右記・権記)の異なり字数が少なくなっていることが分かる。文章量(延べ字数)の少ない御堂関白記は措くとしても、大凡九〇〇〜一、〇〇〇字程度の異なり字を使用している。これと類似の値を示すのが尾張国解文・高山寺本古往来である。これに対して、史書である日本書紀・続日本紀は三、五〇〇字程度と取り上げた資料中最も多い異なり字数となっている。大日本国法華経験記(以下法華経験記と略称する)・注好選・探要法花験記・古事記・将門記といった説話に類する資料は、中間の様相を示し、二、〇〇〇〜一、四〇〇字である。

資料	延べ字数	異なり字数	平均使用度数
古事記	四五,二七	一,四八二	三〇.五
日本書紀	一八二,五六六	三,五四三	五.七
続日本紀	三八,一七六	三,三三三	九.四
将門記	一〇,四三三	一,四〇九	六.九
尾張国解文	七,六六五	一,一七七	六.五
御堂関白記	二,〇五六	四三三	四.七
小右記	一〇,四九六	一,〇六二	九.九
権記	八,〇七二	八八五	九.一
高山寺本古往来	六,四八八	一,〇七九	六.〇
大日本国法華経験記	四九,二七五	二,〇八九	二三.六
注好選	二五,二七四	一,八六六	一三.五
探要法花験記	二七,三七五	一,七三三	一五.四

以上をまとめると以下のようなになる。

異なり字数多



史書が最も異なり字数が多く、次いで靈驗記・説話、文書・古往来・古記録と減少している。この結果と、資料の特性とをそのまま結びつけて考えることは避けねばならない。しかし、大凡正格漢文に近いとされる史書、表現の多様さが見られる靈驗記・説話において漢字の異なり数が多く、これらの資料に比して類型的表現が多くなる文書・古往来・古記録では異なり数が少なくなっていると考えられる。

本稿において特に問題とする注好選・探要法花験記に目を向けると、両資料は異なり字数が近似の値を示している。比較を行った法華経験記も同様の結果であって、これら説話・靈驗記の資料は、異なり字の漢字使用において類似の性格を有しているということが指摘できよう。

2 助字の使用に見る注好選・探要法花験記の特徴

続いて、当該資料の漢字使用の性格をより明確にするため、使用度数が上位の漢字を具体的に検討することとする。比較の対象とするのは助字の類である。これら助字の類は、文章内容に関わる使用の多寡が他の語に比して少なく、資料の比較に際して指標とするに適していると考えられる。

注好選・探要法花験記と他の和化漢文資料とにおける助字の類の使用を比較すると以下のようになる。使用度数の上位に見られる助字を掲げている。³⁹⁾(各漢字に付した算用数字は、上段が使用度数・下段が使用度数に基づく順位である。)

古事記	之 1572 者 602 而 556 也 439 於 371
日本書紀	之 3954 於 1982 而 1756 不 1325 也 1215
将門記	之 531 於 188 而 103 者 92 不 91 也 59
尾張国解文	之 393 不 101 者 65 被 61 也 58 而 57
御堂関白記 (上位30字以内に無し)	
法華経験記	不 681 之 316 (矣 224) 於 187 也 180
注好選	也 462 之 447 不 354 即 249 者 195
探要法花験記	不 301 也 261 之 254 即 207 者 173

第一に看取されるのは、古記録には使用度数上位に助字が現れないという点である。⁴⁰⁾御堂関白記以外の資料では、字種の異なりはあるものの、助字類が上位に見られる。このことは、古記録が他の字に比して助字類をさほど多く使用しないことを示し、このジャンルの和化漢文資料の特徴となっていると考えられる。

続いて、助字類の字種について、その使用度数の順位に違いが存することに気付く。古事記・日本書紀・将門記・尾張国解文では、第1位が「之」であり、法華経験記・探要法花験記では「不」、注好選では「也」となっている。特に「之」が第1位の資料は、それぞれ2位との度数の差が大きく、「之」の使用が目立つ。「之」の使用において、古事記・日本書紀・将門記・尾張国解文のグループとそれ以外のグループとに差異が認められることが分かる。⁴¹⁾また法華経験記と探要法花験記における助字類の最上位はどちらも「不」である。これは他の資料には見られない傾向であって、

靈驗記の類の助字使用が類似の傾向を示す結果と考えられる。¹¹⁾

さて、ここで本稿で取り立てる注好選と探要法花験記に注目すると、他の資料に見られない傾向として、「也」が多く使用されている点を指摘できる。「也」はそれぞれの資料において、

①開闢之時在變化人始稱皇持世助人其皇頭十二也

(注好選・上3オ4)

②其臭香不可近右髮左卷是鬼也(同右・中28ウ5)

③天竺鳩摩羅什三藏者秦曰童壽龜茲國之人也

(探要法花験記・上4ウ1)

④有聲告獻曰我是汝父也(同右・下11オ7)

のように使用され、文末に位置して断定の意を示す用法を担うものである。また、加点の実態から日本語の助動詞「ナリ」の表記として用いられた蓋然性が高いことが知られる。¹²⁾

⑤故思曰非爾(善)弗感非我(善)莫識此是法花三昧前方便也

(探要法花験記・上7オ11)

⑥寔是大師之力也(同右・上9ウ5)

⑦即生不動國。彼在世之時書(善)寫(善)涅槃經一卷。然汝誦經助彼

善(善)故也(下11オ9)

その使用度数を見ると、注好選では全漢字における第1位である。探要法花験記では、第7位であるものの、助字類では第2位であって、しかも第1位との使用度数に比較的差が無い。他の資料では、古事記(第13位)・日本書紀(16)・将門記(18)・尾張国解文(11)・法華経験記(49)となっており、斯かる「也」の使用は顕著な傾向であると言えよう。

この注好選・探要法花験記に共通に見られる「也」の使用は、どのような要因に支えられて成立しているのであろうか。注好選

・探要法花験記に共通するのは、これらが

①仏教的な事柄を題材としている

②説話・記に属するジャンルである

という点である。当該資料が「説話」や「記」に属する文章であることを考えれば、叙述の形式として「くも」型の文が多くなるのは自然なことと考えられ、使用度数が多いこともこの文章の特徴が反映したものと解釈することが可能であろう。

このことから、当該の漢字使用を仏教説話や靈験記の類に特徴的なものと仮定することができる。しかし、ここで問題となるのは、法華経験記は探要法花験記と同様、靈験記に属する資料であって、これが「也」を多く使用してはいない点である。この問題を解決し、先に行った仮定の立証に近づくために、次項において確認の作業を行うこととする。

四、探要法花験記と法華伝記―助字使用の和化について―

探要法花験記の主要な出典の一つとして、唐代に成立した法華伝記がある。この法華伝記の漢字使用を確認することで、探要法花験記の漢字使用の位置づけを試みる。法華伝記全181話の内、探要法花験記の出典と認められる42話について使用漢字の調査を行った。その結果を以下に示す。

延べ字数 一〇、〇二一字

異なり字数 一、二八一一字

平均使用度数 七・二五

文章量(延べ字数)が少ないためか、異なり字数がやや少ない

値となっている。さて、当該資料の具体的な漢字の使用を見るため、以下に使用度数上位の漢字を示す³⁾。

法 144 誦 124 不 115 人 112 華 106 經 105 一 90 生 89 有 82 而 79 天 75 之 71
以 70 中 67 間 67 大 66 十 64 佛 64 三 63 是 62 見 62 爲 58 師 58 此 57
如 55 時 54 日 54 其 52 於 52 身 52 釋 51 寺 50 王 49 來 47 行 47 所 46
者 46 無 45 僧 44 至 41 出 40 山 40 即 40 日 40 也 39 二 39 已 39 自 39
慧 38 在 35 得 35 汝 35 七 34 衆 34 言 34 道 33 方 32 說 32 若 32 受 31
故 31 明 31 下 30 年 30 心 30 門 30

これらの漢字の内、助字類は、

不 115 3 而 79 10 之 71 12 於 52 29

のように現れる(算用数字上段は使用度数・下段は使用度数に基づく順位)。前項において注好選・探要法花験記に見られた「也」の多数の使用は、本資料においては認められない。「也」の使用度は、39であり順位は第45位とかなり低くなっている。

このことから、本資料の漢字使用の実態は、探要法花験記とは異なっていることが分かる。「法⁴⁾」や「不」が上位にくることを考えれば、寧ろ法華経験記に近い状況であると認められよう。

出典とそれに基づく和化漢文資料という近い関係にはありながら、探要法花験記と法華伝記とで「也」の使用順位が大きく異なるのはどのような理由によるのであろうか。このことは、探要法花験記において「也」が添加される場合が多いことに拠るものと考えられる。両資料の同文的箇所(説話)を比較すると、全409例

の添加⁵⁾が認められる。この内、助字が添加されるのは112例、その中で「也」は49例存し、助字の中では添加が最も多く認められるものである。反対に「也」が探要法花験記において削除されるのは、1例のみであって、「也」の添加が一方的なものであることが分かる。これは、中国の出典に存しない漢字が、日本の側において付け加えられているのであって、正格漢文⁶⁾が「和化」した姿の一つとして捉えることができよう。以下に、探要法花験記と法華伝記の同文的箇所における「也」添加の例を掲げる。

① 經五箇年常以所着衣施常住大衆也(探要法花験記・上27オ6)

② 經五年取身所著衣令弟子悉送常住施大衆。(法華伝記・卷6第8話)

③ 告獻曰我是汝父也(下11オ7)

④ 語獻言吾是汝父。(卷5第14話)

以上、出典との比較から、探要法花験記における「也」の使用は、探要法花験記が成立するに際しての「和化」の現象の一つである可能性を指摘した。仏教説話・靈験記の和化漢文資料に「也」が多く使用されることは、この種の文章の叙述の形式に「くである」という断定の文が多いことに起因し、ここに積極的に「也」を使用することがこれらの和化漢文資料の特徴となっている。

それでは、同じ靈験記である法華経験記には、「也」の使用が多くなかったことはどのように解し得るのであろうか。このことは、正格漢文である法華伝記に近い漢字使用を行うことにも現れているように、本資料が正格漢文への志向性が強いことに起因するものと考えられる。本資料には、

③ 再拜跪地。敬白。敬禮救世觀世音。傳燈東方粟散王。

(卷上第1話。行)

④見他受苦。謂是我苦。觀人安樂。爲我受樂。(卷上第21話3行)
のように、字句の数を調べた対句的表現が多用され、中国の駢儷文を意識した文章となっていることが分かる。

むすび

注好選・探要法花験記の漢字使用について概観を行い、和化漢文資料における位置づけについて考察を行った。

その結果、異なり字数においては、史書や文書記録類とは異なる説話・靈験記類としての使用を行うことが分かった。しかし、使用度数の比較からは、「也」を多用することが両資料の特徴となっており、和化漢文における両者の「近さ」を感じさせる漢字使用となっていた。このことは、以下の二つの点において、和化漢文資料を分類する指標的事象となる可能性がある。

①説話・靈験記というジャンルにおいて「也」が多用されること。

②「也」の使用が和化の度合いと相関性を持つこと。

今後、調査資料を広げて本稿における記述の蓋然性を高めることとしたい。

注

*1 東寺観智院蔵注好選漢字索引・醍醐寺蔵探要法花験記漢字索引(私家版・一九九九年十一月)

*2 調査に当たっては、以下の基準を設けた。

①漢字字体は旧活字正字体に従うことを原則とする。
②異体字は、特に用法上の差異が認められる場合以外は、正字体に計上する。

③踊り字及び抄物書は、当該字が示す漢字に計上する。

*3 和化漢文資料における異なり字の量的構造については、先行諸研究において既に指摘が存する。この点においては、本資料がこれら諸文献の漢字使用の範囲から逸脱するものではないことが確認される。

小林芳規 「古事記音訓表(下)」(『文学』一九七九年一月)

浅野敏彦 「真福寺本将門記の漢字・漢語についての一考察」(『国語語彙史の研究』三、一九八二年五月)

同 「平安時代公家日記の漢字―『権記』寛弘七年一年間の漢字―」(『国語文字史の研究』二、一九九四年一〇月)

前田富祺 「記録の漢字」(『漢字講座5 古代の漢字と言葉』一九八八年七月)

藤井俊博 「本朝法華験記の語彙と表記―靈験記・往生伝の文体をめぐる―」(『京都橘女子大学研究紀要』二一、一九九四年一二月) 等

*4 各漢字の中心的な用法を挙げるに止める。尚詳細に帰納すれば、異なる用法が存するものもある。ここでは、数量的な使用の概観を行うことを目的とし、個別的な考察は稿をあらためて行うこととする。

*5 和化漢文を日本語文の表記様式の一つとして認める立場からは、これらを「助字」として一括りにすることには問題があると考ええる。ここでは概観を目的としてこの分類を行った。

*6 取り上げた資料と参考にさせて頂いた先学の論は以下の通り。

小林芳規 「古事記音訓表(下)」(『文学』一九七九年一月)

白藤禮幸 「日本書紀の字彙について」(『お茶の水女子大人文学紀要』一九八一年三月)

星野 聡 『続日本紀総索引』(一九九二年)

浅野敏彦 A 「真福寺本将門記の漢字・漢語についての一考察」(『国語
語彙史の研究』三、一九八二年五月)

三保忠夫 「尾張国解文における漢字について 付「漢字索引正誤表」
(『訓点語と訓点資料』第七六輯、一九八七年二月)

前田富祺 「記録の漢字」(『漢字講座5 古代の漢字と言葉』一九八八
年七月)

浅野敏彦 B 「平安時代公家日記の漢字―『権記』寛弘七年一年間の漢
字―」(『国語文字史の研究』二、一九九四年一〇月)

藤井俊博 「漢字頻度表」(『大日本国法華経験記校本・索引と研究』
一九九六年二月)

*7 前掲、浅野論文 B において「一つの物語を記述する『将門記』『陸奥
話記』に比べて公家日記の『権記』『小右記』の平均使用度数が高い
のは、同一事項を繰り返し記述するという公家日記の性格によること
ろが大きいのであろう。」との指摘が為されている。

*8 古事記・日本書紀・将門記・尾張国解文・御堂関白記のデータは、先
掲論文を参照させて頂いた。大日本国法華経験記については、先掲資
料より私に算出した。その他、先に掲出した資料でここに載せていな
いものについては、使用度数の調査が終了していない。

*9 前掲注 6 浅野論文 B における権記の調査では「之(第 8 位)」「也(第
19 位)」が見える。しかし、これも他資料に見られるような助字の使
用に類するとは認め難く、御堂関白記と類似の傾向を示していると考
えられる。今後、調査資料を増補し、蓋然性を高めることとする。

*10 「正格漢文の性格の強い文献で、「之」が極めて多く用いられる傾向
がある」との指摘がある。(前掲注 3 藤井論文) また同氏は、法華経
験記の漢字の使用について、「之」字の使用がさほど多くない点が、
当該資料の特徴となっているとも指摘している。

藤井氏が「仏典などの影響を考慮する必要がある」と指摘されたこ
種の漢字使用は、本稿の調査でも探要法花験記において同様に認め

られる。このことは、靈験記類の特徴となる重要な文体指標であると
考えられる。

*11 「不」の使用については、前掲注 3 藤井論文に、否定表現が大日本国
法華経験記の特色となっているとの指摘がある。今回取り上げた二資
料(注好選・探要法花験記)には、史書や記録類とは異なる両者共通
特有の漢字使用が認められるものの、「不」の使用に見られるように、
詳細に個々の漢字の使用を検討すれば、その間に違いが存することが
分かる。また、同じ靈験記であっても、法華経験記と探要法花験記と
では「也」の使用頻度が大きく異なる。文章内容(ジャンル)を超え
た和化漢文の用字基盤が存するものと考えられる。

*12 テキストに存する仮名を片仮名で、ヲコト点を平仮名で、句点・読点
をそれぞれ「・」で示した。

*13 使用度数 30 までの漢字を掲げた。

*14 「法」は大日本国法華経験記において使用度数 849 で、第 1 位である。

*15 法華伝記に存しない語・文が探要法花験記に存する場合、この変化を
「添加」と称する。

*16 正格漢文も、ジャンル・時代等様々な要因に基づいて種々の異なる姿
を呈する。この点、本資料を「正格漢文」と一括りにすることには慎
重を要するが、出典とそれに基づく和化漢文資料という関係性から、
とりあえずこのように捉えておくこととする。

*17 他の可能性も考慮に入れる必要がある。「也」の使用を単純に「和化」
と捉え得るのかという問題とも合わせ、稿をあらためて考えることと
したい。

○使用テキスト 注好選(東寺貴重資料刊行会編『古代説話集注好選(原
本影印并釈文)』) 探要法花験記(馬淵和夫編『醍醐寺蔵探要法花験記』)
法華伝記(大正新脩『大藏経』第 51 冊史伝部 3) 大日本国法華経験記(藤
井俊博『大日本国法華経験記校本・索引と研究』)